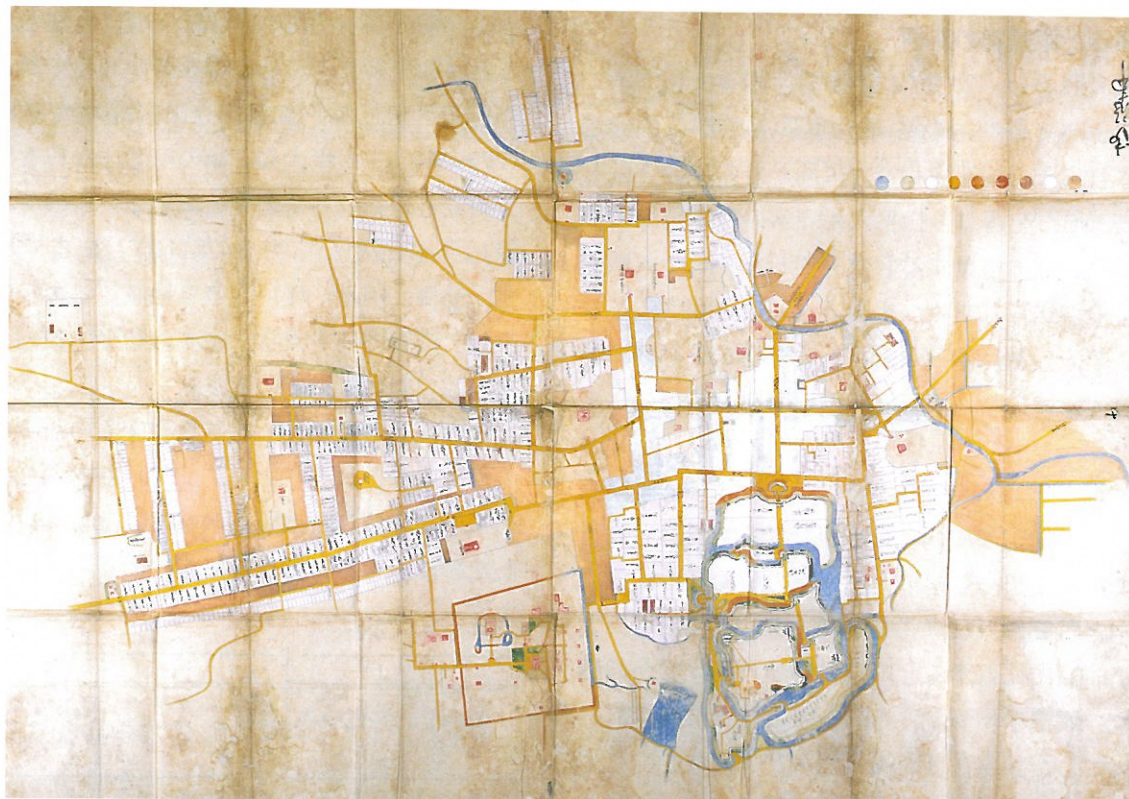




# 博物館だより

第71号



川越城下図  
(右が北になります)

## 川越時代の大興寺と東照宮の変遷

### はじめに

今年度、東松山市在住の石井英三氏から「川越城下図」(表紙の絵図)を寄贈していただきました。本絵図は、平成23年度に開催された第35回企画展「川越城―描かれた城絵図の世界―」に出品した際、文化6年(1809)頃から天保初期(1830年代)頃までの様子を描いた絵図と推定しました\*1。

このたび、この絵図が当館所蔵資料となったことを受け、前回は触れることができなかった大興寺と東照宮に注目し、この寺社の変遷について考えてみたいと思います。

### 1 絵図の伝来、特色等

本論に入る前に、「川越城下絵図」の伝来や特色等をまとめます。

### (1)伝来

本絵図は、松平大和守家家臣の石井家に伝来したものです。石井家は、松平大和守家の儒者(禄高20人扶持〈天保期頃〉)で、江戸時代の末期、藩校「博諭堂」の分校にあたる松山陣屋(現東松山市松葉町付近)の博諭堂の助教等を勤めました。石井英三氏は、この石井家の末裔と考えられます。

### (2)特色

法量は、縦1,225mm×横1,740mmです。武家地は白、十ヶ町は薄水色、道は黄色、寺社の建物は朱色というように彩色が施されています。凡例は色のみで、その説明は記されていません。北西隅には「御作事」の注記があります。城内の様子は詳細に描かれており、「御本丸」や「二重富士見櫓」等の注記もあります。武家地も、「好田左膳」

や「岩下小源太」等と家臣名が細かく記載されています。一方町人地は、「本町」や「江戸町」等の町名は記されていますが、詳細な記述はありません。こうした特色や伝来した経緯等から本絵図は、明らかに武家側の立場で作成されたことがわかります。また城内に記された上級家臣名、「小河原近江」や「沼田式膳」等をもとに、本絵図が描かれた年代を前述のように推定しました。

## 2 大興寺と東照宮の変遷

天台宗大興寺は、寛文7年(1667)、松平大和守家二代直矩なほのりによって播磨国姫路はりまのくに(現兵庫県姫路市)に創建されたとされます。松平大和守家にゆかりの深い寺院として禄高200石を賜り、松平大和守家の所領替えに伴い大和守家と共に移動するお供寺でした。また大興寺は東照宮の別当寺とされ、東照宮と同じ敷地内にありました。幕末の慶応3年(1867)、大和守家が前橋に転封すると前橋に移り、現在は前橋市川原町に存在します。

東照宮は、寛永元年(1624)、松平大和守家初代直基ちかきによって越前国勝山えちごんのくにかつやま(現福井県勝山市)に創建されたとされます。東照宮も松平大和守家の所領替えに伴い、大和守家と行動を共にする神社でした。慶応3年、大和守家が前橋に転封すると川越で築かれた社殿が前橋に運ばれ、明治4年(1871)、現在地の前橋市大手町に再建されました。現在は前橋東照宮と呼ばれています。

松平大和守家が前橋から川越に入封したのは明和5年(1768)で、川越から前橋に転封したのは慶応3年(1867)です。大興寺と東照宮は、松平大和守家が川越藩主であったこの100年程は、川越に存在していたこととなります。この度寄贈していただいた「川越城下図」や『川越松山巡覧図誌』(国立公文書館蔵)の「川越城之図」、かわごえじょうか えづ「川越城下絵図」(東京大学附属図書館南葵文庫蔵)等によると、川越時代の大興寺と東照宮の所在地は、武家地の樹木町(宮ノ下)〈現川越市宮下町1丁目〉で、中曲輪の北で氷川神社の道を挟んだ南側に描かれています(写真1)。これらの絵図は、文化から弘化年間(1804~48)の間の様子を描いたものとされるので、この時期の大興寺と東照宮は、樹木町(宮ノ下)に存在していたと考えられます。しかし『佐久良能仁保比』の「川越城図」(明治20年〈1887〉中島芳嶺著、個人蔵)や「川越御家中新古屋敷絵図」(参考資料)には、城内田曲輪の清水門付近(現川越市郭町2丁目で郭町浄水場の東隣付近、写真4\*2)に描かれています。また『佐久良能仁保比』の

大興寺と東照宮に関する記述によると、この寺社は明和4年、松平大和守家が川越に入封すると前橋から川越城下の樹木町(宮ノ下)に移り、その後の弘化・嘉永年間(1844~54)の藩議で再建が決定し、その後、田曲輪の清水門付近に新たに造営されたとあります。つまり大興寺と東照宮は、明和4年頃は城下の樹木町(宮ノ下)〈写真1・2〉にあり、弘化・嘉永年間以降に城内田曲輪の清水門付近(写真3・4)に再建されたということになります。この内容を確認する史料として「前橋藩松平家記録」(前橋市立図書館蔵)が挙げられます。この史料は、松平大和守家の家老達が日々の政務の中で重要と思われる書類等をまとめたもので、年代は元禄11年(1698)から明治4年(1871)にまで及んでいます。前橋、川越、江戸などと地域ごと編年順にまとめられ、内容は藩主書状、家中の動静、領内の出来事など藩政全般に亘っています。

そのため本史料は、松平大和守家の藩政を知る上での基本史料となっています。この「前橋藩松平家記録」の中に、大興寺と東照宮の移転に関する記述がありましたので、それを編年順にまとめると次のようになります。

年 代	内 容
明和6年4月25日条 (1769)	大興寺・東照宮、川越での普請が完成する。引っ越しは7月とする旨が出される。
同年8月4日条	大興寺・東照宮、川越に到着する。
嘉永7年2月22日条 (1854)	高松院・大興寺に大興寺の地所を家中屋敷とし、大興寺を清水門付近へ再建すること。また、大興寺が再建されるまでの間、高松院を借寺とする旨が出される。
同年3月15日条	大興寺・東照宮、借寺の高松院への遷座は、今月25日とする旨が出される。
同年3月25日条	大興寺・東照宮、高松院に遷座する。
安政2年4月2日条 (1855)	大興寺・東照宮、清水門付近での普請がほぼ完成する。上棟の棟札が記される。
同年4月7日条	大興寺・東照宮、新築された建物への遷座は、今月11日とする旨が出される。
同年4月11日条	大興寺・東照宮、清水門付近に遷座する。
慶応3年3月11日条 (1867)	前橋柿ノ宮の寿延寺、大興寺の借寺とする旨が出される。

(この日以降、大興寺・東照宮の移転に関する記事は確認できなくなります。)

このように「前橋藩松平家記録」から、大興寺と東照宮が川越に存在していた時期は、明和6年(1769)8月から慶応3年(1867)3月頃までの98年間であったことがわかります。また城下宮ノ下から城内田曲輪の清

水門付近に移転したのは、幕末の安政2年(1855)4月ということも確認されます。そして大興寺と東照宮を移転した理由は、この寺社の地所を家中屋敷にするためであったこともわかりました。このような内容と比較すると『佐久良能仁保比』は、細かい点で正確性に欠けるものの、大筋で間違ったことを記述していないことが確認できました。

**おわりに**

城絵図や「前橋藩松平家記録」等の史料を基に、大興寺と東照宮の変遷について考えてみました。川越時代の大興寺と東照宮の所在地を、再度編年順にまとめると次のようになります。

時代	所在地
明和6年(1769)8月から 嘉永7年(1854)3月まで	川越城下宮ノ下(1)
同 7年(1854)3月から 安政2年(1855)4月まで	城内田曲輪の高松院(2)
同 2年(1855)4月から 慶応3年(1867)3月頃まで	田曲輪の清水門付近(3)

このように大興寺と東照宮は、時代によってその所在地が異なっていたことがわかります。そのため松平大和守家時代の川越城下図の年代を考える場合、この寺社の描かれた所在地が、絵図の年代を比定する判断基準のひとつになると考えられます。今後は今触れた視点から、現存する松平大和守家時代の城下絵図を改めて見直す必要があると考えられます。

- \*1 『第35回企画展 川越城一描かれた城絵図の世界』の14「川越城下図」の図版・解説
- \*2 ここは「川越城下図」では、「清水両御住居」と記載されています。また『川越松山巡覧図誌』の「川越城図」には、「清水御殿」と記載されています。現在この場所の記載がある資料は上記の2点だけです。また「前橋藩松平家記録」には清水門付近を「清水」と表現しており、ここに建物が存在したような記録はありません。そのため2点の資料にある記載は、この場所の名称(呼称)を記しているように思われます。

【付記】

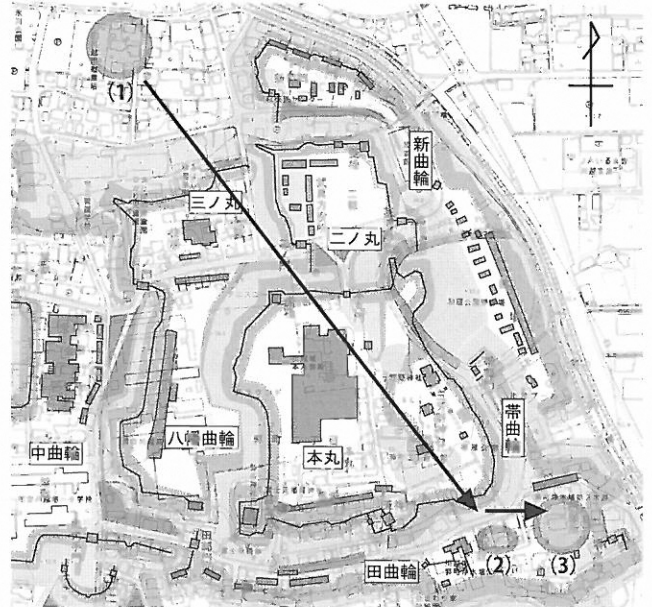
「前橋藩松平家記録」の解読にあたり、佐藤啓子氏の協力を得ました。今回紙面の都合上、「前橋藩松平家記録」その他の史料は省略しました。

「主要参考文献」

- 『前橋市史 第二巻』前橋市 1973
- 『前橋藩松平家記録 第11巻』他 前橋市市立図書館 1997
- 『川越市史 史料編近世I』川越市 1978
- 『松平大和守家の研究』松平大和守家研究会 2004
- 『第35回企画展 川越城』川越市立博物館 2011

(学芸担当 井口信久)

大興寺・東照宮の所在地の変遷図



川越城平面図の部分



写真1

城下宮ノ下の所在地

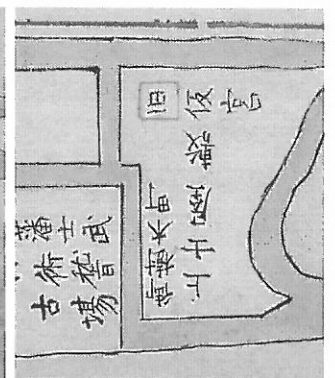


写真2

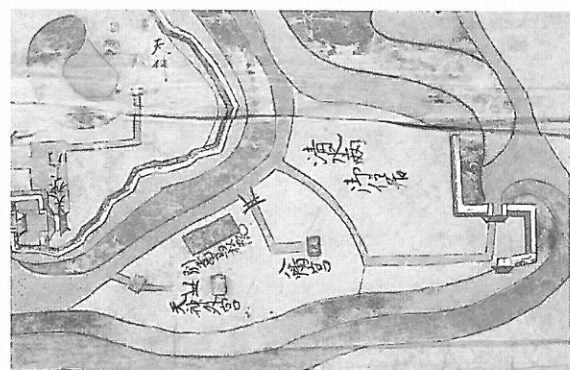


写真3

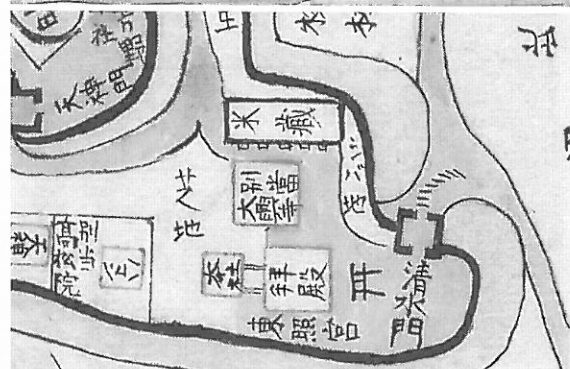


写真4

城内田曲輪内の清水門付近の所在地

# 蔵造り資料館「煉瓦塀」小考

## はじめに

明治26年の大火以後につくられた蔵造りの町並みは、伝統的な土蔵造りを採用しながらもモルタルや煉瓦といった幕末以降に導入された新しい建設資材が使用されていることも特徴とすることができます。川越市蔵造り資料館でも住居棟と一番蔵の間や二番蔵と三番蔵の間に防火用と考えられる煉瓦壁などが設けられています。

もっとも目を惹く煉瓦構造物としては「煉瓦塀」が挙げられます。資料館の建物群は明治26年の大火後の復興によって建てられたものであり、店蔵は同年4月に上棟したことが分かっていますが、この煉瓦塀については、いつ頃建てられたものかは不明です。今回、あらためてこの煉瓦塀を観察する機会があったため、その成果を小稿としてまとめてみました。

## 1 煉瓦塀の現状

蔵造り資料館の煉瓦塀は敷地南側及び西側境界、北

側境界の一部に設けられています(本稿では便宜的に南側境界のものを塀S、西側境界を塀W、北側境界のものを塀Nとします。:図1参照)。

塀Sは、中央付近で南側にやや屈曲しながら西へ延び、総延長は41.6mを測ります。煉瓦塀北面には控え柱状の突出部が3カ所設けられ(控1~3)、このうち道路際から約21mに位置する控1を境に塀の様相が変わるため、以東を塀Se、以西を塀Swとします。塀Seの東側はモルタル仕上げの塀を介して、石材風の仕上げを施したアーチ型の門に接続されています。塀Swは控1~3が設けられ、控1と控2の間には鉄扉による出入口の跡が残っています。

塀Wは塀Sw西端部を始点として、敷地北西隅までの延長18mに設けられています。隣接する塀Swと比べて、全高が高くなっており、控柱状の突出部はありませんが、北側端部は柱状に補強されています。



写真1 塀Se~アーチ部分近景  
基礎はコンクリート造でモルタル仕上げ。  
壁の厚さは煉瓦の長手1個分。



写真2 塀Sw近景  
基礎は煉瓦積。笠木の高さは塀Seと  
同じだが、基礎の高さはこちらが高い。



写真3 塀N基礎部分近景  
房州石4段積で、5段目はモルタルに  
よる石積風仕上げ。

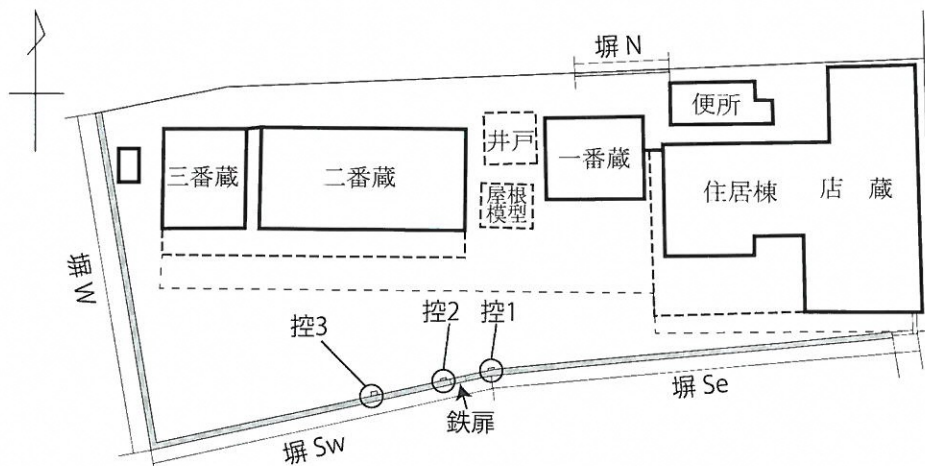


図1 蔵造り資料館平面図



写真4 敷地南西隅塀Sw - W接続部  
塀Swの笠木部分が崩れ、塀Wが積み直されている。



写真5 同最下部  
煉瓦の下、基礎に伊豆産の凝灰岩が用いられている。



写真6 塀Sw・塀Se南面  
目地も基礎のモルタルも塗られていない。塀Seと基礎が弧を描いて収束する塀Swの基礎。

住居棟北側に位置する塀Nは延長5mと短く、煉瓦部分はモルタルで「ドイツ壁(モルタル掃き付け仕上げ)」の化粧が施されているため、一見煉瓦塀には見えないことが特徴です。

### (1)共通する仕様

煉瓦の積み方は各塀とも「フランドル式(明治期に誤訳され「フランス積」とも呼ばれる)」と呼ばれる長辺と小口が交互に並べられる積み方です。フランドル式は煉瓦積が導入された当初に流行した積み方ですが、後に導入された「イギリス式」の方が強度があり、合理的とされたため、フランドル式は廃れていったといわれています。

各塀とも最上部の笠木部分は煉瓦の積み方を変えて装飾的な意匠が施されています。笠木の上面にはモルタルが残っている部分が認められ、雨が煉瓦の目地に浸み込まないような化粧が施されていた可能性を示唆しています。

### (2)各塀の相違点

各塀の下部には基礎が設けられていますが、塀Sw及び塀Wが煉瓦積であるのに対し、塀Seはコンクリート造でモルタル仕上げ、塀Nは房州石による石積になっています。

各塀に使用されている煉瓦の大きさは表1のとおりバラつきがあります。塀Seの煉瓦に比べ、塀Swのものはやや小ぶりで、塀Wは長辺が長い傾向があります。塀Nは表面にモルタル仕上げがあるため、確認できませんでした。

煉瓦と煉瓦の間の目地の塗り方としては、塀Seは他に比べて白く新しいように思われ、仕上げとしては凹凸や気泡などが散見できることから雑な印象を受けます。

### (3)塀Seと塀Swの関係

控1を境に東西に分けた塀Seと塀Swは煉瓦のサイズが異なるだけでなく、横目地が通っておらず、基礎もコンクリート造と煉瓦積と異なっているため、施工に時期差が

あったと考えられます。また、塀Seの南面(館の外側:館内からは見えません。)には目地が入られておらず、基礎の化粧もありません。

一方、塀Swは煉瓦積の基礎と記しましたが、西端最下部の破損部分から、伊豆産の凝灰岩質の石材が基礎に使用されていることが確認できます。

塀Seの最西端、控1に接する部分を見ると、端材を用いて煉瓦の長さを調整している様子が見られます。煉瓦積を施工する場合、基本的に一段ずつ水平方向に積んでいくため、施工寸法の調整は端部に於いて行われます。フランドル式の場合、長手と小口が交互に並べられるため、段によっては必ず半端な寸法が残ることになります。その調整が控1の東側で行われているので、この部分が塀Seの西端部であり、既に塀Swがあったところに塀Seが作られたという新旧関係を想定することができます。また、南面では基礎が弧を描くように収束しており、このことから塀Swが控1部分までで、一旦仕上げられていたことを示しています。



写真7 塀Se西端部・控1東側部分  
東から伸びてきた塀Seが控1に突き当たる部分で、端材による調整が行われている。また、目地も控1に合わせるように上方に上がっている。

#### (4)塀Swと塀Wの関係

両者は敷地南西隅で接続されており、煉瓦の大きさが異なるほか、塀Swの笠木部分を一部崩して塀Wが積み直されている様子が観察できるため、塀Wが後から建てられたと考えられます。塀Wの笠木部分は塀Swの笠木部分の最上部レベルから始まっており、その分だけ塀Wが高くなっています。

## 2 資材について

### (1)煉瓦

煉瓦は江戸時代末期、オランダ人H・ハルデスが長崎鋳鉄所の建設に採用した際に、長崎伝習所で焼いたものが国産のはじまりとされています。関東では、明治5年(1872)の富岡製糸場の創業に際して、渋沢栄一の進言で日本煉瓦製造株式会社が設立され、各地へ煉瓦が供給されるようになりました。川越周辺では、市内府川や北足立郡平方村(現上尾市平方)などに煉瓦メーカーがありましたが、他にも瓦職人が煉瓦を焼いていたこともあり、小規模なメーカーはさらに多かったと推測できます。

煉瓦の大きさは国内でもメーカーや製造時期によって違っていました(表1参照)、設計上必要なサイズが特注で焼かれることもありましたが、大正14年(1925)から昭和初期にかけて210mm×100mm×60mmに日本標準規格(JES)によって統一されましたが、蔵造り資料館で使用されている煉瓦は少なくとも3種類以上確認でき、いずれも長手方向が220mm以上のものであることから、少なくとも規格統一以前の製品であることは間違いないようです。

### (2)コンクリート

モルタルはセメントに砂を混ぜたもので、コンクリートはこれに砂利を加えたものです。セメントは石灰とある種の粘土を混合してつくった接着剤で、19世紀前半にイギリスで特許がとられた「ポルトランドセメント」の改良品が現在でも主流になっています。

国内への導入は、幕末にフランス製のポルトランドセメントが輸入されたことにはじまり、明治8年(1875)に日本最初の官営セメント会社「深川セメント製造所」が設立されました。コンクリートの使用が本格化する契機となったのは明治30年(1897)の小樽港築港工事の着手以降とすることができます。その後、明治36年に銀座の黒沢ビル、明治44年(1911)に三井物産横浜支店など、鉄筋コンクリート造の建造物が建てられると、明治24年(1891)に中京地方を襲った濃尾地震によって煉瓦建築が倒壊したこともあり、高層建築は鉄筋コンクリート造が主流になりました。

塀Seは基礎にコンクリートが使用されていることから、明治30年以降に建てられたとすることは異論のないところであり、店蔵等の建造物群よりも後に建てられたこととなります。

### (3)石材

市街地における石積に関しては、前号の山田氏の論考に詳しく書かれていますが、蔵造りの建物の基礎には石材が用いられており、その多くは伊豆産の凝灰岩と考えられています。塀Nの基礎の石積は房州石と考えられますが、房州石の使用例は大正期以降のものが多いため、施工時期を判断するカギとすることができます。

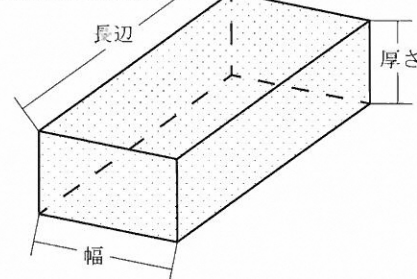
## 3 煉瓦塀の建築時期を推定する

本稿では蔵造り資料館の煉瓦塀について、その特徴とそれぞれの差異について記してきました。これらの結果をもとに、煉瓦塀の築造時期を推定してみましょう。

まず、館内の煉瓦塀は規格が統一された煉瓦ではないため、少なくとも大正14年以前であることは間違いありません。

塀Swは基礎に伊豆産の凝灰岩が使用されており、これは当館の店蔵を含む多くの蔵造りの建物が同様の石材を基礎にしていることから、店蔵と同時期あるいはそれに近い時期、言い換えれば「大火からの復興期」の可能性が高いと考えられます。

煉瓦各辺の呼び名



注) 煉瓦は焼成後の焼縮みがあるため、大きさは一定でない。

左表の当館の煉瓦の大きさは無作為に抽出した10個の中央値。

煉瓦の種類	寸法			備考
	長辺	幅	高さ	
塀 Se	220	105	59	
塀 Sw	220	107	55.5	
塀 W	229	109.5	57.5	
穴倉	210	100	50	
日本煉瓦東京形	227	109	60.6	明治35年
並形	224	106	53	明治38年
JES規格	210	100	60	大正14年

表1 煉瓦の大きさ

塀Wが塀Swよりも新しいことは前述のとおりですが、基礎の様子が煉瓦造と塀Swに共通していることから、比較的近い時期であると推測できます。

塀Seは土台が全く異なるコンクリート造であること、端材煉瓦による施工寸法の調整を行っていることや南面基礎の弧状の仕上げなどから、塀Swが控1部分で完結していたことが考えられ、後から塀Seが施工されたとすることができます。また、南面の化粧がないことから、施工時点で南側隣地に建物が建てられ、仕上げが困難であったことを示していると考えられます。

塀Nは土台に房州石が使用されていることから大正期の建造と考えられますが、煉瓦部分に施されたドイツ壁風の仕上げがアーチ型の門の一部でも見られることから、塀Seはアーチからモルタル造の塀までと同時期もしくはそれ以前の施工とすることができます。想像を逞しくすると、塀Swを大火復興期とするならば、塀Seを明治末期から大正期、塀Nを大正期の所産とすることができます。

#### おわりに

私たちは、この煉瓦塀を未来に残すため、保存方法も含めて考えなければならない時期にきています。ま

ドイツ壁仕上げ



写真8 塀Seとアーチ型の門

塀Seの基礎とモルタル造の壁は色調が異なる。アーチ上部の黒っぽいモルタルは「ドイツ壁」仕上げ。

た、耐震性能を考えると、今後の蔵造り資料館の保存修理事業においても、重要な箇所とすることもできます。

煉瓦塀も含め、川越の蔵造りの町並みにはまだまだ分からないことがたくさんあります。これらは外から見ただけでは分からない場合が多く、修理などの際に情報を収集し、蓄積したものを丹念に分析することが必要です。これからも蔵造りの研究を継続していきたいと思います。(教育普及担当 天ヶ嶋 岳)

## 同好会ニュース



### 博物館同好会「華の会」ともしび賞受賞



博物館では、様々な講座や教室を開催しています。受講後「もっとやってみたい。」という方々が同好会を結成し、現在、5つの同好会が活動しています。

同好会は、博物館内でそれぞれの活動を行いながら、博物館事業にも積極的にご協力いただいています。今回は「華の会」の活動をご紹介します。

華の会は、博物館の機織り教室を受講した方々が、平成8年に結成した会です。緯糸の代わりにひも状に裂いた布を織り込む「裂き織」を中心に、手織りに関わることを学んでいます。日頃の活動の成果は、2年に1度開催される博物館文化祭や作品展に作品を発表しています。

また、博物館との連携として、まず博物館が企画する教室で、講師を務めていただいています。今年度実施した裂き織教室では、裂き織の他、アンギンや糸まきなど機織りの基本を教えていただきました。

次に、小学校3年生の社会科学習を支援する企画「むかしの勉強・むかしの遊び」展では、学習アドバイザーとして、特に洗濯板による洗濯の体験を指導していただきました。

そして、毎週火・水曜日の午後には、来館者を対象に、裂

き織体験を実施していただいています。予約なしに、来館者は裂き織の見学と、希望されれば実際に織ることができます。

以上のような活動によって、平成25年11月18日、華の会は、埼玉県文化ともしび賞を受賞しました。この賞は埼玉県が「地道な文化活動を続け、地域文化の向上に貢献している個人及び団体」に贈るものです。

これは平成14年の川越唐棧手織りの会の受賞に続くもので、博物館としても大変うれしく思います。今後とも同好会とともに博物館をますます盛り上げていきたいと思っています。



第40回企画展

「絵図で見る川越—空から眺める江戸時代の川越—」

会期：3月29日（土）～5月11日（日）

江戸時代の中頃、川越市域には92の町村があり、その多くは川越藩領でした。村や町に残された古文書の中には、村全体を描いた村絵図や屋敷割りや記した町絵図などの絵図があります。色鮮やかに描かれた絵図は、山野や河川など自然の様子、町並みや集落・耕地など、目に見える形で江戸時代における町村の景色を私たちに示してくれます。この企画展では、江戸時代から明治初期にかけて作成された絵図をもとに、川越市域の村や町の様子を中心に紹介いたします。



笠幡村絵図

○講演会

「近世社会と絵図作成」

4月12日（土）杉本史子氏

申込：往復はがきにて

4月5日（土）必着

○野外博物館教室

「江戸時代の村を歩く」

①中福村を歩く 4月20日（日）

②岸村を歩く 5月11日（日）

申込：往復はがきにて

①は4月5日（土）必着

②は4月13日（日）必着

○歴史講座

「絵図を読み解く」

4月19日・26・5月10日（土）

申込：4月4日（金）より

電話、FAXまたは電子申請にて

利用の御案内

◆入館料

区分	博物館	川越城 本丸御殿	蔵造り 資料館	共通入館（観覧）券			
				博物館 ・美術館	博物館 ・本丸御殿 ・蔵造り 資料館	博物館 ・本丸御殿 ・蔵造り 資料館 ・美術館	博物館 ・本丸御殿 ・蔵造り 資料館 ・美術館 ・まつり 会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	100円 (80円)	300円	300円	450円	650円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	50円 (40円)	150円	150円	220円	450円

※（ ）内料金は、団体〔20名以上、1名につき〕の場合

◆開館時間 午前9時から午後5時まで（ただし入館は午後4時30分まで）

◆休館日 月曜日（休日の場合は翌日の火曜日）※平成26年4月28日は開館

第4金曜日（休日を除く）年末年始（12月28日～1月4日）

館内消毒（6月下旬）特別整理期間（12月下旬）

\*開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも原則として同じ

（館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館、蔵造り資料館は1月2日から開館）

平成26年

4月							5月							6月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5				1	2	3		1	(2)	3	4	5	6	7
6	(7)	8	9	10	11	12	4	5	6	(7)	8	9	10	8	(9)	10	11	12	13	14
13	(14)	15	16	17	18	19	11	(12)	13	14	15	16	17	15	(16)	17	18	19	20	21
20	(21)	22	23	24	(25)	26	18	(19)	20	21	22	(23)	24	22	(23)	(24)	(25)	(26)	(27)	(28)
27	28	29	30				25	(26)	27	28	29	30	31	(29)	(30)					

7月						
日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	(7)	8	9	10	11	12
13	(14)	15	16	17	18	19
20	21	(22)	23	24	(25)	26
27	(28)	29	30	31		

○印は、3館休館（博物館、資料館、本丸御殿）

○印は、2館休館（博物館、本丸御殿）

○印は、1館休館（博物館）

◆交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅より

または西武新宿線 本川越駅より、

●東武バスにて 「蔵のまち経由」乗車札の辻バス停  
下車徒歩10分、または「小江戸名所めぐり」乗車  
博物館前バス停下車徒歩0分

●イーグルバスにて 「小江戸巡回バス」乗車博物館  
・美術館前バス停下車徒歩0分

※御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。



博物館の最新情報をパソコン又は携帯電話へ配信します

メール配信を希望される方は、川越市ホームページのオンライン「メール配信サービス」から「博物館メール配信」の登録を行ってください。携帯電話では、右のQRコードから登録の手続きができます。随時最新の情報等を配信します。



※登録料および情報提供料は無料ですが、インターネット接続やメールの受信などにかかる費用は利用者の負担となります。

発行日 平成26年3月25日

発行 川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1 TEL049-222-5399 FAX049-222-5396

Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp ホームページ http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/